

2017 vol.39 夏号 源流からのたより

ぽたい!

源流のひとしづく



CONTENTS

- ・事務局長コラム
- ・「源流学」⑬
- ・源流の主役たち
- ・土倉家の家憲
- ・吉野川紀の川しらべ隊
- ・源流学の森づくり



森と水の源流館



住所 奈良県吉野郡川上村宮の平
公益財団法人吉野川紀の川源流物語
TEL 0746・52・0888
FAX 0746・52・0388
URL <http://www.genryuu.or.jp>
E-mail morimizu@genryuu.or.jp

15周年記念行事 (平成29年4月29日)

みなさんのあたたかい気持ちにつつまれ
開催することができました。

公益財団法人 吉野川紀の川源流物語
事務局長 尾上 忠大

「15周年って、ちょっと中途半端かな」
「10周年は盛大にやったし、20周年に向けて、15周年記念日はこじんまりと!」。昨年からそんなことを考えていました。ところが決して大規模ではないですが、この日は、思い出に残る、中途半端ではない大きな記念日となりました。10周年の時にも勝るといふか、前の10年にはなかった、この5年間の歩みを多くの人たちと確認でき、その人たちそれぞれとのつながり方を、あたたかい気持ちとともに表現していただいた1日でした。みなさんへの感謝の気持ちでいっぱいです。

第I部



川上村に寄せてくれたオリジナル曲を交えたソロコンサートや、解説とともにたくさんの川上村の美しい情景の上映。そして見どころは2人による映像と音楽のコラボレーション。客席のみなさんは息をのんで見つめました。また楽しいトークショーも行われました。

コンポーザーピアニスト山川亜紀さん
写真家辻本勝彦さんのコラボ企画

宮口侗迪理事から記念の言葉



「地域、地域にそれぞれの価値がある」先生の専門の地理学とは、そのちがいをみつける学問であり、その価値を活かせれば過疎対策につながるというお話など、「川上宣言」とともに歩んだ15年間を振り返る記念日のスタートを飾っていただきました。

第III部



森ツアーのサポートや、調査、森づくりで協力をいただく源流人会のみなさんに飾らない雰囲気、山小屋でいろりを囲んでいるかのような演出で、語り合っていました。客席に駆けつけてくれた会員さんからもメッセージをいただきました。

源流人さん、あつまれ!

さらに詳しくと、事務局長の熱いおもいは
ホームページでどうぞ! (^_^)

<http://www.genryuu.or.jp/pdf/170429.pdf>

第II部



流域の交流から、真の連携をめざして「紀の川じるし」にいっしょに取り組む紀ノ川農協宇田組合長やESDの授業づくりを行った奈良市立平城小学校新宮先生とともにふりかえりました。

『思いをつなぐ川』リレートーク



毎

年5月末ごろになってくると、おかちゃん（嫁）が、節句のちまきや、でんがら（柿の葉ずしを作ったりして、毎日がせわしゅうなってる（忙しくなってる））。

特

に柿の葉ずしは、作ったしりから、ほうぼう（あちらこちら）に嫁入りしとるから、どれぐらい作つとるか、分からんなあ。だいたい1回に作る数が、米10合で、約100個分や。子や孫に送る以外にも、いろんなところに届けとるみたいやで、おかちゃんの楽しみにもなつとるみたいやぞ。

柿

の葉ずしは、川上村だけでなく、奈良県南部地域のそれぞれれの家庭で作られてきた郷土料理や。いまでは全国的に知られるようになったし、1年中、いつでも買えるようになった。

け

どな、わしらが若い時分は、初夏のごちそうやった。たいがいどこの庭先にも、柿の木が植えてあって、若葉のやわらかいときに葉をとって、作ってくれた。葉が硬くなつたら、もうおしまいや。しょっちゅう食べれるもんでもなかつたんやで。戦後は米も鯖もなく、物流が流れるようになってから、わしらの口に入るようになったなあ。

だ

いたい6月1日の鮎の解禁に、友達らと鮎釣りに行くのに、

や

つぱり酒飲みの家は塩がきいていたし、わしのところは、親

おかあ（母親）に作つてもらつて、川原で食べ比べしとつたなあ。「お前のところはちよつと辛いなあ」「お前のところはちよつと甘いよ」と笑いもつて、みんな自分のところの味が一番おいしいと思つてたと思つ。

父も酒を飲まん甘党やつたさかい、他の家に比べたら、やつぱり甘いやつたなあ。当時は同じ地域にあった魚屋から鯖を仕入れ、作つてたけど、いつのまにか、鯖も作るようになり、いまでは鯖と鮭と半々や。子どもや孫らは鮭の方が好きやけど、わしは、やつぱり鯖の方がうまいと思つ。



達ちゃんが語る

子どもたちに伝えたい「源流学」

⑬わが家の

「柿の葉ずし」



で

は、さつそく、わしの家の柿の葉ずしを伝授したいと思つ。ちよつと甘いやけど、うまいぞ。

ほ

んまは1日たった方が、味がなじんでうまいんだが、わしは、



柿

の葉（ずし）もそうやけど、節句のちまきやでんがら、おもちも、昔は、その時期にか食べられへんだ。旬と行事が合わさつて、自然と共生してきたことを肌で感じてた。でも、いまでは真冬にトマトやスイカも食べるようになって、子どもたちがスイカの旬を知らんようになってきた。おかしな話や。わしらは自然に教わり、そこから知恵が生まれ、先人からいろいろと学んできた。自然に生かさせてもらっていることを忘れたらあかんと思つとる。

材料（約100個強）

- ・米 10合
- ・昆布 適量
- ・塩 大さじ1
- ・焼津サバ（塩サバ） 適量
- ・塩鮭 適量
- ・酢 適量（型押し用）
- ・柿の葉 100枚強（作る数だけ）（合わせ酢）
- ・酢 180cc
- ・砂糖 400g
- ・塩 大さじ1
- ・ハイミー 大さじ1

作り方

- ①米10合に、定量の水、昆布、塩を入れて米を炊く。
- ②柿の葉は、包みやすいように、茎部分を切り、葉を拭いておく。
- ③ご飯が炊きあがったら、炊飯器の蓋を開けないまま、5分間蒸らし、この間に合わせ酢の材料を混ぜておく。5分過ぎたら、炊飯器を開け、合わせ酢を入れ、混ぜないまま、蓋を閉め、再度、30分間蒸らす。
- ④蒸らし終えたら、半切り（木の半切りは余分な水分を吸い取ってくれるのでおすすめ）にご飯をあけ、うちわなどで蒸気を飛ばしながら酢飯を混ぜます。手早く切るように混ぜるのがコツ。
- ⑤すし飯は、型押しを活用。酢を入れたポウルに型押しを漬ける（酢飯が漬かないようにするため）。型押しにサケ、サバ、酢飯の順に詰め込んで型押しをする。型押しから外した寿司は、麴蓋や餅箱などに並べる。
- ⑥最後に柿の葉でくるりと包み、押し箱に詰める。
- ⑦並べ終えたら、上から木の板、重しになるものを置いて、半日～1日で完成。





オスの腹部先端腹面はミヤマカワトンボ同様白色で、求愛行動をとる際に腹部をそり上げ、白色部を強調しながら小刻みに翅を震わせ、最高潮に達すると、川に流れに身をゆだねるといった特徴的な儀式行動をとる。ミヤマカワトンボと違い、オスの個体数が多いため、活動のピーク時にはしよっちゅう縄張り争いが生じ、青い翅をキラキラさせながら、激しい追いかけあいを繰り返す。

吉野川流域では、吉野町や大淀町の吉野川に流れ込む支流において確認されている。

ハグロトンボ（羽黒蜻蛉）



アオハダトンボ属の中で最も都市河川に適応した種で、かつては河川中～下流域の農業環境の河川や里山林に多数みられ、最も人の身近にいたカワトンボであった。翅の色が黒いため、鉄漿（おはぐろ）の意味を込めてハグロトンボと名付けられたが、最近は鉄漿文化が衰退したため、翅が黒い蜻蛉の意でハグロトンボと呼ぶことが一般的となっている。出現期は6月中旬から9月下旬までと長い期間出現する。羽化したての未熟な個体は、成熟するために河川近隣の里山林の林縁で1～2週間ほど過ごす。お盆の時期にも林縁で見られることから、精霊蜻蛉や幽霊蜻蛉と呼ばれることもある。個体数が多く、里山林と河川を移動すること、都市部でも条件さえ整っていれば生息が可能であるため、市民活動や住民参加活動として各地

でマーキング調査が行われている。アオハダトンボ同様、河川にせり出したツルヨシの葉先に止まり縄張りを誇示するが、オスの個体数が多くなりすぎると縄張りの境界があいまいになってしまう。オスの腹部先端腹面は白くなく、メスの縁紋も無い。求愛行動はミヤマカワトンボと同じく、腹部をそり上げ、小刻みに翅を震わせながらホバリングを行うが、アオハダトンボのように川の流れに身をゆだねることはしない。オスの個体数が増えると、一頭のメスに複数のオスが同時に求愛行動をとることがある。

吉野川流域では普通にみられ、吉野川分水が流れ込んでいる飛鳥川ではかなりの数の個体が見られる。

アオハダトンボ属の見分け方

ここまで種の説明を行ってきたが、いざ捕まえたときに種類が分からないと困るので、簡単に見分けるポイントを表にまとめてみた。

雌雄	種名	生息環境	出現期	体長	翅の色	縁紋	腹の白色部
オス	ミヤマカワトンボ	河川上流	6月上旬～8月下旬	51mm～61mm	こげ茶色	無し	有り
	アオハダトンボ	河川上流～中流	5月下旬～6月中旬	41mm～48mm	青みの強い黒色	無し	有り
	ハグロトンボ	河川中流～下流	6月中旬～9月下旬	42mm～52mm	黒色	無し	無し
メス	ミヤマカワトンボ	河川上流	6月上旬～8月下旬	49mm～60mm	薄い茶色	有り	無し
	アオハダトンボ	河川上流～中流	5月下旬～6月中旬	40mm～45mm	前翅が薄い茶色	有り	無し
	ハグロトンボ	河川中流～下流	6月中旬～9月下旬	40mm～48mm	黒色	無し	無し

ミヤマカワトンボは、奈良県ではあまり他のアオハダトンボ属と混生しない上に、翅の色が特徴的であるため、簡単に区別ができるが、アオハダトンボとハグロトンボは慣れるまで区別がしづらいかもかもしれないが、アオハダトンボには白があると覚えておくとよいだろう。できれば、アオハダトンボ属3種を捕まえ、標本にしたうえで、並べて自分自身で区別点や共通点を見つけることも面白いのかもしれない。

(こやま あきら)



川岸に佇む翠のトンボ

初夏の河川敷に姿を現すトンボの仲間。オスの体は金緑色に輝き、翅を開いたり閉じたりを繰り返して、河川にせり出した植物の葉の先や水面に顔を出している岩の上陣取る。時には激しくオス同士が追いかあひ、時には優雅にメスを誘う。

今回は、吉野川とその流域においてみられるアオハダトンボの仲間3種について紹介していきたいと思う。



古山 暁 (まкруみあ)

ミヤマカワトンボ (深山川蜻蛉)



日本最大のカワトンボで、世界でも屈指の大きさを誇る。深い山の溪流でよく見かけられることから、『深山』の名前が付けられた。出現期は6月から8月まで。河川の上流に生息するため、河川にせり出した葉の上に止まる事よりも、水際の岩の上に止まることが多い。蜻蛉の滝周辺でよく姿を見かけるが、近づくとともに飛び立ってしまうため、思いのほか臆病なイメージを持ってしまう。他のアオハダトンボ属との最大の相違点は翅の色で、ミヤマカワトンボだけが茶色に黒くて太い筋が入る。メスになると、翅の模様の特徴はより顕著に表れる。

また、オスの腹部先端腹面は白く、縄張りの誇示やメスへのアピール時に腹部をそり上げる際によく目立つ。求愛行動は、オスが翅を小刻みに震わせながらホバリングし、メスへ近づく。メスに拒否されると、どこもなく寂しそうに元居た場所に戻るところが見ていて飽きない。産卵は独特で、メスが水中に潜って産卵する。

吉野川流域では、蜻蛉の滝周辺や、北股川、三ノ公川など、川上村周辺で多く見られる。



アオハダトンボ (青肌蜻蛉)



日本で最も美しいカワトンボで、オスが翅を開くと青く光る。そのため、青い肌のトンボの名が付けられた。出現期はハゲロトンボと混生する地点では5月下旬から6月中旬とやや短い、そうでない場所では7月頃まで見られる。河川のやや上流部から中流部にかけて生息し、河川にせり出したツルヨシなどの葉先に止まり、縄張りを誇示する。メスの翅には白い縁紋があり、ハゲロトンボとの区別は容易になるが、オスには縁紋が無い。



その二五

歴史担当の成瀬匡章が、吉野川・紀の川流域の遺跡について紹介します

土倉家の家憲

何代も続く名家・旧家には、家を存続させるための知恵や心構えを説いた家訓が伝えられていることがあります。土倉庄三郎の家にも代々伝えられてきた家訓がありました。今回はその土倉家の家訓を紹介したいと思います。

土倉家の家訓は、名家・旧家の家訓を集成した『日本現代 富豪名門の家憲』（1908 博學館編輯局）に掲載されています。著者の岩崎徂堂は、日本全国の名家・旧家の家訓を集成した本を執筆しようと考えました。その本の中で土倉家の家訓を紹介しないのは「読者に辜負する所少なからず」（註1）と考えた徂堂は、「険をふ蹈み難をこ踰え」て川上村を訪れ、晩年の土倉庄三郎から取材をしました。



『日本現代富豪名門の家憲』表紙

土倉家の家訓は成文化されていなかったため、徂堂は庄三郎からの聞き書きを8条にまとめています。

旧仮名遣いで少し難しいのですが、全文を載せます。

1. 須く謙遜讓なるべし。
2. 主人は一家の模範なれば他に先ちてヨリ多く勤勞せよ。
3. 公共慈善の事業に對しては決して人後に落る勿れ。
4. 一家相和し相信じて共に家業に勵め。
5. 自ら儲け可き金の三分は人に儲けさせよ。
6. 祖先を敬し父母に孝なれ。
7. 子弟の教育を重んじ智を研き徳を修めしめよ。
8. 勤儉質素を旨とし徳を履んで他を化せよ。

そして家訓を実践した庄三郎のエピソードが記されています。

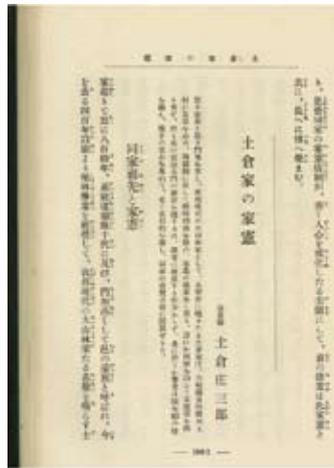
それによると、庄三郎は人より先に起床して、自ら伐採や運搬作業を行うだけでなく、筏を組むことさえあったそうです。また父親の庄右衛門の晩年には、庄右衛門を背負って山林の見回りを行い、

森林経営について教えを受けていました。

川上村長の時には、報酬の全額を役場職員に分け与える

一方で、自分は質素な服を着ていました。川上村に小学校を建設し、同志社大学や日本女子大学へ援助するなど、庄三郎が教育熱心であったことはよく知られています。一方で人それぞれ能力や特技が違っているので無理をせず得意な分野を伸ばすよう努めるべきとも述べています。

東熊野街道の整備や内国勸業博覧会への出品、同志社大学・日本女子大学への援助も、木材流通の活性化による事業拡



土倉家家憲



土倉庄三郎・鶴松写真

大や、子どもたちの教育という目的があったのですが、庄三郎の行動の基本には、自らの利益より公共の利益を重んじ、自らが徳を積むことで周囲の人たちを変えていこうとする家訓の考えがあったのでしよう。

（註1）辜負・・・期待に背くこと

参考文献

岩崎徂堂1908 『日本現代 富豪名門の家憲』 博學館編輯局

田中淳夫2012 『森と近代日本を動かした男…山林王・土倉庄三郎の生涯』 洋泉社



5月7日に「吉野川紀の川しらべ隊 吉野山のコケをしらべよう」を実施しました。当日は天候にも恵まれ、大人から子どもまで13人の参加者で実施しました。

吉野駅前で、コケ植物の基礎知識の説明やルーペの使い方指導し、その後、周辺のコケ観察を行いました。コケ植物は、苔類、蘚類、ツノゴケ類の3つのグループに分かれますが、苔類・ツノゴケ類は道盛正樹さん（認定NPO法人大阪自然史センター理事）が、蘚類は木村が観察を指導しました。

繁殖の季節を前にして、フタバネゼニゴケは、生殖器官である雌器托が伸びているのを観察できました。水辺では、溪流などの水辺で見られるアオハイゴケも



七曲りの坂周辺で観察

観察できました。

この日は吉野山の入口、七曲りの坂にて、ルーペを使ってじっくりと観察しました。その結果、3時間ほどで、32種を観察できました。しかし、じっくりと小さなコケを観察しましたので、移動できたのは、駅から七曲りの坂の最初の一曲がり目の坂まででした。普通に歩いたら5分ほどですが、コケを観察しながらだと2時間以上かかりました。



雌器托を伸ばしたフタバネゼニゴケ



水辺に生えていたアオハイゴケ



ハイゴケの葉の先端がフック状に曲がるのをルーペで観察

巡回展

「川に生きた人たち」

「吉野川流域の考古学」

（2017年3月10～12日）を開催しました

川上総合センターにて、巡回展「川に生きた人たちー吉野川流域の考古学ー」を開催しました。

2016年、吉野林業・水源の森・丹生川上神社・栃餅など58の文化財が「森に育まれ、森を育んだ人々の暮らしとこころ」美林連なる造林発祥の地「吉野」として日本遺産に登録されました。今回の展示は、日本遺産登録に合わせて吉野川に関わる考古・民俗資料を川上村・吉野町（3月17日～19日）・大淀町（3月3日～5日）で巡回し、流域の歴史や文化を知ってもらうというもので、川上村で48名、吉野町で約50名、大淀町で約100名の入場者がありました。



川上会場
（3月10日～12日）



大淀会場
（3月3日～5日 大淀町文化会館ひだまりホール）

また、この巡回展は橿原考古学研究所附属博物館が、文化庁の補助を受けて行っている「移動博物館」事業を活用し、橿原考古学研究所附属博物館（誰もが楽しめる「ユニバーサル・ミュージアム」事業実行委員会）・川上村教育委員会・大淀町教育委員会・吉野町立吉野歴史資料館の共催、森と水の源流館の協力事業として企画・実施しました。今後の市町村連携による文化施設の活用モデルケースとしたいと考えています。



吉野会場
（3月17日～19日 吉野歴史資料館 展示室）



源流学の森づくりとは、20年ほどに伐採され、再生しつつある天然林を立派な源流の森に戻そうという取り組みです。

5月3日に、源流人会会員の方を中心に9名の仲間が集まり、作業を行いました。早速、森を見回ります。「炭の材料に良いのでカシは必要」「紅葉の綺麗なサクラとカエデを残して」「枯れた木を伐らなければ」などと思いつきながら。前回も書きましたが、シカの食害がかなり気になるところです。途中、すぐに補修できるような箇所は直して、ついでに薪も伐っていきます。足元にはタニギキョウやヒメレンゲなどの小さな花が顔を覗かせていたり、尾根まで登ると、ちょうどシャクナゲの花が咲いていたり、もうそろそろ初夏の陽気です。森の掃除屋さん、オオセンチコガネも本格始動、一所懸命、糞転がし、いいえ、引っ張っていました。

この日は、ちょうど良い機会でしたので、山菜天ぷらも楽しみました。現地です。



採った山菜を揚げ、森の恵みをいただきます。もし採れなければ昼食がちょっと



質素になってしまふところでしたが、そこは豊かな源流の森、色々な種類を調達することができ、お腹いっぱいになりました。

体力のいる作業もありますが、楽しいこともたくさんありますので、気になる方はぜひ参加してみませんか。お気軽にお問い合わせください。



6月3日(土)に川上村白屋にて村内外から7人が参加し、スタッフと一緒に午前中に白屋の未来への風景づくり見本園の草刈り作業を行い、午後には白屋の自然観察と外来種駆除作業を行いました。

大滝ダムの試験湛水で地すべりが発生し、全戸移転を余儀なくされた白屋地区では、企業・団体と共に景観保全の活動「未来への風景づくり」事業が進められています。この地に人は暮らさなくなりましたが、人と共に暮らしていた生き物

はまだ残っています。クワの木にはクワイチゴと称される甘い実がなっていました。このような人の生活と密接に関わってきた樹種などを

守っていくことも大切なことです。森と水の源流館では、保全に必要な基礎研究として白屋の生き物調査も実施しています。

今回は、見本園での体験的な草刈りボランティア作業のあと、調査で分かってきたことなどを基に自然観察も実施しました。草刈りをしながら、ナナホシテントウを観察したり、奈良県では初めて発見された外来種、シロバナモウズイカを駆除したり。外来種では、白屋で特に問題になっている特定外来生物のナルトサワギクや要注意外来生物のアメリカオニアザミなどの駆除も実施しました。



奈良県で初めて見つけた外来種シロバナモウズイカ 外来種のアメリカオニアザミはトゲが大変危険です クワの木にはおいしい実がなっていました みんなで草刈りをがんばりました

源流人募集



源流人とは かけがえのない水を生む源流の自然を愛し、源流を守り、育てる人です

源流人会とは 集い、話し、遊び、学び、考え、触れ、交流し、参加し、喜びを分かち合いながら、源流を守り、育ててゆこうとする会です

ともに源流学を楽しみ学ぶ仲間を紹介ください

個人	2,000円
家族	3,000円
学生	1,000円
団体	10,000円

年会費 郵便振替 00940-1-331163

もりもり 水源地の森守募金

ありがとうございます。平成28年度、184,758円の森守募金をお預かりしました。奈良県内すべてと、和歌山県内の紀の川流域市町村の小学4年生全員に配布した教材印刷費や源流域での斜面崩壊対策費用にあてさせていただきました。今後ともご支援をよろしくお願いいたします。



郵便振替 00950-2-331164 「水源地の森守募金」あて